

平成9年1月30日
No.21

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター ☎ 05965-2-1732
〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503 FAX 05965-2-3724

日本最古の土偶が出土！



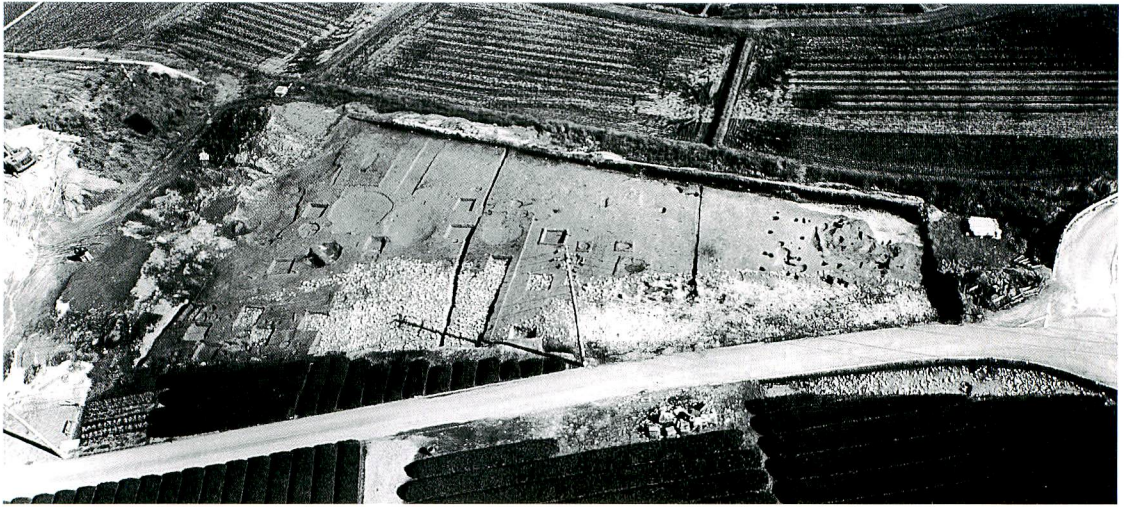
出土した土偶（原寸大）

昨年^{かゆみ いじり}の三重県飯南郡飯南町の粥見井尻遺跡の発掘調査では、これまでの縄文時代はじめ頃のイメージを塗り替える画期的な発見がありました。それは、縄文時代草創期^{さかのぼ}に遡る土偶です。

みつかった土偶はひとにぎりの粘土でふっくらとした胴体を作り、これに頭や乳房を貼り付けたものです。全長は6.8cm、最大幅は4.2cm、乳房までの厚みは2.6cmです。この他にも同じような頭の破片も1つ出土しています。これらの土偶は、これまで全国各地で出土している土偶の中では最古のものになります。

なぜ粥見井尻遺跡の土偶が最古と判るのか？それは竪穴住居から土偶といっしょに出土している土器や石器から判るのです。

土器は無文のものを中心に、隆線文、爪形文、押圧縄文、条痕文といった文様があります。その多くは薄手で、口が外に小さく反り、丸底か丸味のある平底のようです。石器は縄文時代はじめ頃^{や がらげん ま き}に特徴的な矢柄研磨器が4点と約230点の石鏃^{せきぞく}、少量の搔器^{そう き}や楔形石器等^{くさびがた}です。遺物の



1 無文



2 隆線文



3 爪形文



4 押圧縄文



5 条痕文

縄文土器（1のみ実物の $\frac{1}{3}$ 、他は $\frac{1}{2}$ ）

総量は、石の剥片も含めると約12,000点になります。これらの遺物は、縄文時代の草創期（約12,000～11,000年前）に特徴的にみられるものです。

土偶は、4棟ある竪穴住居のひとつからみつかりました。使われなくなった竪穴住居のくぼみに、割れた土器や石器などとともに出土しました。

このような竪穴住居はすべて円形で、直径は約4m、深さ60cm程でした。どれも床の中央がややくぼみ、炉はありません。柱穴もないかわり、まわりに屋根を支えるための木の先を埋めた小さな穴がありました。このころの住居跡は鹿児島県などに3例があるだけで、全国的には非常にまれなものです。

今回の調査によって、縄文時代のはじめ頃から土偶が作られ、本格的な家を建てるようになっていたことが明らかになりました。従来考えていたよりずっと早くから縄文文化の特徴がそろっていたことに驚かされます。また土偶などの新しい文化は、大陸から伝わって来たものか、日本列島の中で生まれたものかを考える上で、中部日本の三重県で最古のものが出たことは、重要な問題です。

（中川 明）

発掘現場での研修を終えて

いま私の立っている所は、鈴鹿市石薬師町にある三重県消防学校の敷地内です。ここが、4年間に及ぶ大調査を終えた石薬師東古墳群があった所です。50基の古墳の周溝が確認され、そこから大量の埴輪や様々な種類の須恵器などが出土しました。今は平坦な敷地でも、約1500年前には、50基ほどの古墳が所狭しと並んでいたのです。

そのうち、私が埋蔵文化財センター研修員として発掘研修に参加したのは、最終の5ヵ月間です。すごく貴重な体験をした5ヵ月間でもあり、4年間の大調査の偉大さを感じた5ヵ月間でもありました。勉強になったことの一つは、出てきた埴輪や須恵器などのものの状況を正確に記録するという作業です。ある範囲に散らばって出てきた多くの土器のかけらを、一つ一つていねいに方眼紙に描いていきます。形、大きさ、位置関係、傾き、縮尺、われる以前の元の形、などを考えながら記録していきます。集中力と根気のいる作業でした。

また、この発掘研修を通して感じたことは、4年間の経験をつんだ作業員さんの仕事ぶりです。ただ掘るという作業を繰り返すだけでなく、土の色のちがいや土器の出てくる状況などを予想しながら、常に問題意識を持ちながら仕事をすすめてみえます。見習うべきことの多い、ここ、石薬師東古墳群での発掘研修でした。 (東員町 城山小学校 岡)

「えっ、私がこれをしゃべるの？」11月2日に現地説明会をすることになり、その役割分担を決めたとき、私は不安な気持ちになっていました。

その時の私の現場は粥見井尻遺跡。そう、あの日本最古の土偶が現れた遺跡です。土偶が出土し10月にマスコミに発表されると、連日多くの報道関係者や見学者が訪れ、その対応に追われて発掘の手を止めることも度々ありました。

そして11月の現地説明会でこの私が土偶の説明をすることになってしまったのです。もともと知識のない私は急いで本を調べたり人に聞いたりして、付け焼き刃で「質問しないで」と願いながら説明会に臨みました。幸い無事に終えることができましたが、このような価値ある遺跡を掘ることができ、さらに多様な対応の仕方や知識も身につけることができ、研修員の身ながら本当に幸運だったと思います。ただ少し残念だったのは石器製作現場としての重要性をマスコミにあまり認識してもらえなかったことですが、ある意味ではマスコミ受けに左右されない発掘の価値を理解する機会になったようにも思います。

この遺跡に限らず4月からの研修は、視野の狭かった私を大きく成長させてくれました。(津東高校 前川)



今回紹介するのは、中勢道路の建設に伴い平成8年度に調査を行った位田遺跡から出土した碁石です。位田遺跡は、津市のほぼ中央を流れる安濃川北岸の自然堤防上に立地します。調査の結果、平安時代を中心とした遺跡であることが分かりました。中でも計画的に配置された掘^{ほっ}立柱建物群、200点以上の緑釉陶器片や宝珠硯^{ほうじゆけん}の出土が注目されます。

碁石は、建物群の周りを囲むような溝から24個（白石13個、黒石11個）まとまって出土していて、その様子から元は木か布などの入れ物に入っていたものと思われます。時期は同じ溝から出土した遺物から平安時代中期（10世紀）と考えられ、建物群とほぼ同じ頃のものです。白石は水晶製、黒石は那智黒に近い黒色粘板岩製です。全体に丁寧な加工が施してあり、いずれもほぼ円形で、断面は楕^だ円形をしています。大きさは、直径14.6～16.6mm、厚さ6.1～8.4mm、重さ2.0～3.6gですが、白石と黒石に特に違いはありません。なお、双六の駒の可能性もあります。



県内の出土例としては、明和町^{さいくわう}の齋宮跡から黒石2個と白石1個、上野市^{いがかくふ}の伊賀国府跡から白石1個があります。その数はともかく、出土している遺跡は当時の中心地、京の都とつながりの強いところばかりです。位田遺跡は、その計画性をもった建物群、多量の緑釉陶器^{すずり}や硯などから権力・経済力をもった地方の富豪層^{ふごう}の屋敷地であったと考えられます。中央の権力に何らかの形で結びついて、碁石もその関係からもたらされたのでしょう。



いずれにしても、1000年前このような鄙びた地でも京の都と同じように優雅に囲碁が指されていたことは確かなようです。（米山）